<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者名</td>
<td>三笠 利幸</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>社会文化研究所紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>ひふむしごうし</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>127-137</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2010年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1265/00000410/">http://id.nii.ac.jp/1265/00000410/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
書評
マックス・ヴェーバー著 中山元訳
『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
（日経BPクラシックス、2010年）
三 笹 利 幸
ヴェーバー没後90年目にあたる今年、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（以下『倫理』と略す）の新訳が現れた。定番となっている大塚久雄訳が岩波文庫の一書に入ってすでに20年以上の歳月が流れた今日、現代の読者に向けた新たな訳の試みがなされることは、まずは歓迎しなければならないだろう。

現代的訳文
訳者である中山元については、多くの説明は必要あるまい。フーコー研究をはじめ、多数の思想書、翻訳書があり、本訳書にさきだって同じく日経BPクラシックスから、ヴェーバーの『職業としての政治』（以下『政治』と略す）および『職業としての学問』（以下『学問』と略す）の訳も出版している。ヴェーバー研究者ではないが、翻訳のプロである。その中山によって『倫理』が訳された。
歴史を振り返れば、『倫理』がはじめて日本語に訳されたのは、1938年のことであった。訳者梶山力の格調高い訳文は、未来社から梶山力訳・安藤英治編『倫理』として復刻・刊行されており、現在でもそれに触れることができる。この梶山訳が後の社会科学の進展にたいしてもった意義は、きわめて大きい。しかし、すでに70年以上前の訳文は、格調高いとはいえ、現代の読者にはとり

—127—
つきにくいものとなってしまったことは否定できない。その意味では、1989年
に岩波文庫に入れられた大塚久雄訳『倫理』は、梶山訳に比してかなり読みや
すい訳文となってはいる。しかし、それでもすでに20年以上前の訳文であり、
中山訳はさらに現代的なやわらかい訳文を目指しているようである。たしかに、
大塚のようにヴェーバーを専門的に研究した者が翻訳をする場合には、専門家
であるがゆえのかだわりがあり、訳のわかりやすさよりも正確さを優先させ、
結果的にわかりにくい訳文となってしまうということはしばしばおこることだ。
それにたいして中山は、ヴェーバーの専門家ではなく、翻訳の専門家であると
いう点を活かして、読みやすい訳文をつくっていっているといえよう。

そうした中山の手による『倫理』は、たんに文章が現代的で読みやすいだけ
ではない。これまでの訳にはなかった配慮がいくつもなされている。『政治』
と『学問』を訳出したときと同じく、中山は「思考の道筋がすぐには通じがた
いところもあるため、編集になるのが多めに」訳者による「補足」を訳文中に挿
入している。また、中山は原文にはほうならず、段落ごとに訳者の責任で「小
見出し」をつけている。さらに、これまでの『倫理』訳書にはなかった配慮と
して、人物や事象について多くの訳注がつけられた。ルター、カルヴァンはま
だしも、一般にはあまり知られない多くの人名がなんの軽蔑もなく繰り出され
る『倫理』では、それだけで面食らう者も多かったはずであり、ましてやキ
リスト教についての知識をほとんど持ち合わせていない者にとっては、これま
た多くの教派や著作の名前が出て来ることに目が回る思いがしていたはずであ
る。そうした古典特有の、いやヴェーバー特有の「困難」のために、『倫理』
を読む者が減り、あるいは『倫理』の正確な理解が障害されていたとすれば、
中山訳はそうした状況を打開するひとつの大きな貢献をなすと考えられる。既
存の訳では読みやすさ、理解のしやすさへの配慮は十分だったとは言い切れず、
難解な原文をわかりやすい現代語にし、加えて訳文に括弧で訳者の言葉を補い
つつ訳注まで付すことで、読者をヴェーバーの世界へ誘おうとする姿勢は評価
すべきであろう。
読みやすさと正確さ

ただし、こうした訳者中山の配慮が、残念ながら徹底されたものでなかったり、かえって読者を混乱させる原因にもなっていたりするところが見受けられる。従来より幅広い読者が想定されるのがうえに、惜しまれるところである。

中山は読者の便のために、原文にはばならって、段落ごとに小見出しをつけた。なるほど、段落ごとに原著者ヴェーバーの意図したところをまとめていくことは、『倫理』を読み解く上できわめて重要な作業であり、また一般の読者や初学者にとってこうした小見出しは理解の助けとなる。しかし、原著の第6段落[RS1:29-30]および第7段落[RS1:30]を段落として分けず、断ることもなくひとまとめにして小見出しをつけてしまっている。すなわち、中山訳では39ページ3行目に小見出し『本書の課題』と著まれ、同ページ最終行までがひとつの段落ということになっている。ところが、原著では中山訳39ページ4行目から9行目までが第6段落であり、10行目から最終13行目までが第7段落なのである。中山はこれをあたかもはじめからひとつの段落であるかのように取り扱っている。

まったく同じことは、原著の第8段落[RS1:30]、第9段落[RS1:30]、第10段落[RS1:30-31]にもいえる。中山訳43ページには冒頭に「資本主義の精神」の概念の定義」という見出しをつけられ、その後、45ページ3行目まではひとまとめとなっている。しかし、ここは原著では3つの段落から構成されている。すなわち、中山訳43ページ2行目から4行目が第8段落、43ページ5行目から8行目が第9段落、44ページ1行目から45ページ3行目までが第10段落に当たる。ここの中山は断ることなくひとまとめにしている。

なるほど、ここで指摘した段落はどれも小さな段落であり、これもかえってまとめるほうが読者にとって親切だという判断がたったいたのかもしれない。もしそうであるならば、それはそう断るべきであり、わずかずれた中山は訳書冒頭に「凡例」をつけ、「段落ごとにつけた見出しはすべて訳者によるものである。読みやすいように、段落の内部で適宜改行している。」とまで書いているのだ。
から、そこで訳者の判断で原著の段落に変改を加えたことに言及しておくべきであろう。原著者の文章を翻訳者が勝手に変更することは、許されない。

段落の問題と同様な問題が他にもある。すべてを書くことはできないが、たとえば、『倫理』がはじめて『社会科学・社会政策アルヒーフ』に掲載された年を、「1904-5年」ではなく、「1905年」と誤記している。また、ベンジャミン・フランクリンの引用について、ある箇所ではウェーバーにそって訳しながら、別の箇所では『倫理』にあるウェーバーの引用した文ではなく、フランクリンの『自伝』原著からわざわざ訳し直している[中山訳:55-57]。なぜウェーバーの引用文ではなく、『自伝』の原著から訳し直さなければならないのか、その理由はわかりかねるが、ともかく、『自伝』から直接訳してしまうために、ウェーバーをつけた強調点(原文でゲシュペルトになっている箇所)はまったく無視されて訳されてしまった。たしかに、ウェーバーがさまざまな著作を「不正確」に引用することは有名なことであり、原著に忠実に引用することは重要であるかもしれない。しかし、そのためにウェーバーがなぜそこを引用し、どこを強調しようとしたのかという意図が消されてしまうならば、かえって『倫理』を読む者の理解を妨げることになる。

翻訳全体の方向性として、読みやすい、わかりやすい訳文を目指したことは随所からうかがえるが、そうした配慮によって原著に変改を加えたため、かえって正確さを欠いてしまったり、ウェーバーの意図が見えなくなってしまったところがあるのは残念である。

小見出しの妥当性

こうした原著を変改してしまっているという問題に加えて、中山による小見出しにも、読者の理解の助けとなるというよりも、かえってミスリードしてしまいかねないものが多々見られる。

そのすべてをここで詳細に論じることはできないが、たとえば、先に問題にした訳書43ページから45ページにかけての、原著では第8，9，10段落に当た

— 130 —
書評『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

部分につけられた小見出しについて取り上げよう。そこにつけられた小見出しは、「資本主義の精神」の概念の定義」である。

一般の読者はこの小見出しを見てどう考えるだろうか。まずこの段落を読めば、ヴェーバーによる「資本主義の精神」の「定義」がわかる。飛躍して読む始末になるだろう。しかし、それはいったん裏切られることになる。中山訳をそのまま引用してみたい。

この研究には「資本主義の精神」というタイトルに付いているが、これはなかなか意味深長である。これはどのような意味なのだろうか。これからの語を「定義」しようとしてみると、研究の目的に本質的にかかわる困難な問題点がすぐに明らかになってくるのである。……このような歴史的な概念は、この個体に特有のありかたが成立するために重要な意味をもつ現象の内容にかかわるものであるから、「もっとも近い類において、その種の違いを探す」という[アリストテレス的な「類と種差」の] 図式にしたがって定義する（ドイツ語で表現すれば「限定する」）ことはできない。歴史的な現実のうちで確認された個別の要素を組み立てという方法で、これを定義しなければならないのである。だからこれを最終的な形で概念的に把握しうるのは、研究の最後になってからであり、作業を始める前にそれを把握することはできない。[中山訳43-44]

ヴェーバーはここで定義など行っていないことは、火を見るよりも明らかであろう。いや、ヴェーバーは定義ができないと言っているのである。にもかかわらず、中山のつけた小見出しは「資本主義の精神」の概念の定義」であった。もちろん、この小見出しは、「資本主義の精神」の概念の定義にかかわることが書かれている段落という意味であり、単純にこの段落で「資本主義の精神」の定義が提示されるという意味ではないと強弁することも可能であろう。しかし、それは強引な言い分であって、読者の理解のためにつけた小見出しであ
ければ、さらに練った小見出しにしておく必要があるはずである。

そして、そうした配慮はすでに「翻訳」の領域を超え、「解釈」を示してしまっていることに注意しなければならぬまい。もちろん、翻訳自体がひとつの解釈であることは多言を要しないが、少なくとも原著者が示していない文言や文章を補ったり、ましてや見出しをつけるということは、訳者が前もってその原文の解釈を行い、彼なりの理解を示すことになる。またそれは、訳者の解釈を示すだけでなく、読者を訳者の解釈へと導くことにもなる。別言すれば、読者の解釈をあらかじめ封じてしまうことにもなるのである。

大塚訳には、『倫理』末尾部分に訳者である大塚による「解釈」が示される箇所がある。

バックスターの見解によると、外物についての配慮は、ただ「いつでも脱ぐことのできる薄い外衣」のように聖徒の肩にかけられていなければならなかった。それなのに、運命は不幸にもこの外衣を鋼鉄のように堅い鎧としてしまった。[大塚訳:365]（傍点は引用者による）

まさに『倫理』の白盾と言いうる箇所の一部だが、ここにある「不幸にも」という部分に相当する原語はない。ヴェーバーは幸か不幸かという価値判断はしていない。樫山訳には存在しなかったが、大塚が密かにここで自らの解釈を入れ込んで、読者を大塚の解釈へと導こうとしたわけだ。中山訳ではもちろん「不幸にも」などという解釈は示されていない。その意味では、訳者自身の解釈は角括弧に入れて示すという方針を訳文自体には貫き、大塚訳の軽を踏まないようになっているようである。しかしながら、小見出しをつけるという試みは、そうした慎重な訳文の作成をも超えて、訳者中山の解釈へと読者を回収する可能性がある。

小見出しの不適切なものは他にもある。もう一箇所検討してみたい。原著で第3段落にあたる箇所にある見出しである「ドイツのカトリックの異例性」［中
山訳22]という小見出しについてはどうだろうか。この段落ではヴェーバーはドイツのカトリックが「異例」であると主張したいのだろうか。ここではあくまでも、プロテスタントとカトリックとの比較を行い、両者ともにそれぞれの経済的な特性が政治的な状況とは無関係に示されるということが指摘されている。カトリックが「異例」であるという指摘では全くないだけでなく、プロテスタントとカトリックとの行動様式の差が、政治的な状況から説明されるべきものではなく、「内面的特性」から探し出すべきものだという指摘を行って、『倫理』が何を問題として、どこに注目して議論を進めていくのかを示しているところである。にもかかわらず、ここを「ドイツのカトリックの異例性」という段落だと解ると、そもそもヴェーバーは『倫理』冒頭で何をしようとしているのか分からなくなるだろう。いや、それは古くからある『倫理』への誤解、すなわち、ヴェーバーはプロテスタントズムを高く評価し、カトリックを軽賄したという誤解を助長しかねないものですろう。

中山のつけた小見出しの妥当性を吟味することで、逆に明らかになるのは、ヴェーバーの議論の濃密さである。簡単にひと言でその段落を要約することができないような重厚な議論をヴェーバーは展開している。訳者である中山は、ヴェーバーの議論はそうしたものであることを重々承知しながら、それでもなお、既訳との違を鮮明にし、読者への配慮として小見出しをつけていったということだと解しておきたい。すでに指摘した「ドイツのカトリックの特異性」のほかに、たとえば「商取引の比喩」[中山訳287]などといった、およそその段落の意図するところを表したものとはいがたい小見出しや、あるいは「ツィンツェンドルフ」[中山訳328]や「メソジスト派」[中山訳345]などのように固有名詞だけが示されるというものもあるが、こうした見出しであっても、それなりに交通整理がなされるところがないわけではない。むしろ既訳にはない初めての試みとしてつけられた小見出しは、読者にヴェーバーの議論は段落ごとにきちんと内容をふまえながら読みすすめるべきだという、『倫理』解読のための案内役を果たしていると考えることができるだろう。

－133－
俗説を超えて『倫理』に迫る

既訳がすでに存在し、その訳の完成度がそれなりに高いものである——梶山訳はもちろん大塚訳も、誤訳やさまざまな問題があり決して完全な信頼をおけるものではないとしても、ある一定以上の質を持った訳であることは衆目の一一致するところだろう——という状況にあって、この中山訳はあえて世に問われたわけである。少なくともヴェーバーに強い関心を持ちながら研究をすすめている者としては、新訳にはヴェーバー研究の進展に資することを期待したい。

たしかに、中山訳にはこれまで論じてきたような問題点はあるが、しかし、現代の読者にとってはおそらく諸訳書のなかで最も読みやすいものであるはずだ。そうした訳書が現れ、また、大塚訳や梶山訳との対比が可能となり、その意味では『倫理』をじっくり読む環境が整った現在、いったい『倫理』には何か書かれているのかをより深く吟味することが可能となった。中山訳の小見出しも含め、これまでに示された『倫理』解釈や誤解をいっぱいにのらみながら、それとはたしてヴェーバーが『倫理』で議論していることがどれほど近いのか、遠いのかを確定しつつ読み進めること。こうした『倫理』の解読がなされていくとすれば、中山訳はその役割をおおいにはたすことになるだろう。

実は遅ればせながら、中山訳について書評があることを知った。東洋経済新報社のホームページに掲載されている書評である。そこでは、本訳書を紹介しきつ次のように述べられる。

資本主義の社会を突き動かしている駆動因とは何か。それは勤勉な労働か、それとも欲望の肥大化か。いやいや、カネ儲けとは一切関係のない信仰心こそ資本主義の源流、というのがヴェーバーの見解だ。

私は、ここに見られるような、およそ『倫理』をきちんと読まず、俗説をもとにした粗雑な誤解がこともなげに示される、こうした状況が本訳書の刊行をきっかけに変えられていくことを望む。ヴェーバーはどういう問題設定をし、どう
書評 『プロテスタントィズムの倫理と資本主義の精神』

いう方法論で議論を詰め、どういう歴史的因果連関をあきらかにしていったのか、それを丹念に追うことなく、臆断で議論されれば、上記のような誤解がかりとおっていく。

諸訳書および原著について
本書評では、『倫理』の3種類の訳書について、中山訳、大塚訳、枡山訳の呼称でそれらを区別することにする。また、ヴェーバーの原著はRS1と略す。引用あるいは参照指示については[中山訳:15]などのように、訳書名のあとに当該ページ数を入れて示す。

大塚訳：大塚久雄訳 1989 『プロテスタントィズムの倫理と資本主義の精神』
岩波書店

枡山訳：枡山力訳・安藤英治編 1994 『プロテスタントィズムの倫理と資本主義の《精神》』未来社


参考文献
安藤英治 1991 『ヴェーバー歴史社会学の出立—歴史認識と価値意識』未来社
マックス・ヴェーバー著、中山元訳 2009 『職業としての政治 職業としての学問』日経BPクラシックス
三笘利幸 2008 「日本における『倫理』受容についての一考察」橋本労・矢野善郎編『日本マックス・ヴェーバー論争』ナカニシヤ出版

— 135 —
*1 書評ということであれば、本来、その著作の内容にまで踏み込んだ吟味をする必要がある。しかし、本書評では新しい訳書を取り上げているという性質上、その訳文および翻訳にどこかの訳者なりの創意工夫についてのみ論じていくことにその課題を限定したい。
*2 『倫理』が日本の社会科学にどう受容されていったのかについては、三笹2008参照。
*3 さらに、これは単純なミスだと信じたいが、中山訳49ページ1行目以降の部分も、原著では第12段落にあたる箇所である。ここには小見出しがついておらず、前の段落とひとまとめにしたようにも見える。ちょうどページがわるところで、中山が前の段落と結び合ってしまったのか、それとも段落という意識はあったが単純に小見出しをつけてこなかったのか、はかりかねる。とてもく、ここも原著では段落となっていることがわからない状態である。
*4 付言しておけば、中山は『政治』と『学問』の訳でも、同様にウェーバーの段落構成を訳者の意図からさまざまな変更している。『倫理』では、原著の段落にほぼならっているが、『政治』『学問』の訳では、およそ原著の段落構成をたどることは不可能なほどの改変を施している。たとえば、『学問』の訳では、原著の段落が真ん中で分断されてしまっている箇所がある。すなわち、中山訳『学問』196ページ4行目から198ページ6行目までは、原著では第23段落にあたる。しかし、中山はこれを分断し、196ページ最終11行目までをその前の段落（原著では22段落にあたる）にくっつけ、そこでいったん段落を切って、あたかも197ページ冒頭から新たな段落が始まっているかのようにしてしまっている。
*5 中山は『訳者あとがき』で本訳書の底本をRS1と書いている。RS1には次のように記されている。

Veröffentlicht im Jafféschen Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik (J. C. B. Mohr, Tubingen) Band XX, XXI (1904 bzw.
書評 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

1905). [RS1:17]

みられるように、中山のあきらかな誤記である。しかし、これは単なる「誤記」ではないのかもしれない。というのも、まったく同じ「誤記」が大塚訳にも見られるからだ。大塚訳でもここは「一九〇五年」となっている。ただし、大塚は次のような訳注をつけていた。


すなわち、大塚はこの箇所についてはヴィンケルマン版にしたがって訳をなおしたことをはっきり示している。もちろん、事実に照らせば、ヴィンケルマン版は間違いであり、原著者ウェーバーが書いた1904-5年が正確な表記である。ヴィンケルマンもそれにしたがった大塚も「誤記」をしていることになる。

中山訳につけられた「訳者あとがき」を読んでも、中山はヴィンケルマン版にはまったく触れておらず、要するにRS1を底本として訳をしたはずです。にもかかわらず、ここを「1905年」としたということはそっと大塚訳を踏襲したということだろうか。ともかく「誤記」であることは間違いない。

この「誤記」が決して些末なことではないのは、すでに安藤英治が論じてきたとおりである[安藤1991]。『倫理』は、1904年に第1章が執筆され、1904年末のアメリカ旅行を挟んで第2章が書かれたという事実がある。この作品成立上きわめて重要な経緯が、「1905年」と誤記することで見えなくなってしまうのである。

*6 http://www.toyokeizai.net/life/review/detail/AC/6027cd199b8304cf95103e618f5e9774/にある橋本努による書評より引用。